



第 005 号 2020 年 6 月 17 日 牟田誠一郎

京都インバウンド・バブル

現在、京都で小さな旅館を運営していますが、今回の新型コロナは僕らのビジネスに大きな影響を与えています。兎に角、予約がゼロの状況が 3 か月続き、その間、売上がゼロなのです。2020 年の 1 月頃までは忙しくしていましたからこの事態の急変には驚いています。

思い起せば、2014 年あたりから所謂インバウンド旅行客が数多く京都を訪れ、お蔭で僕らのビジネスも潤ったわけです。2017 年頃から京都市内の旅館やホテル用の土地も活発に取引され、近くにある民家が億単位のお金で売買されているのを見てバブルの再現だなと思いました。1990 年前後でのバブルを経験し、もうこんなバブルはないだろうと思っていましたが、京都で再びインバウンド・バブルを経験することになったわけです。

昨年、このインバウンド景気を駄目にするリスク要因は何かと考えをめぐらすことがありました。真っ先に浮かんだのはサーズ(SARS)でした。あのような規模のパンデミックがあればインバウンドは終焉するだろうなと直感しました。まさか新型コロナがそれであったとは我ながら驚いた次第です。パンデミックは宿泊業にとっては実に明白なリスク要因であったわけです。昨年暮、京都における宿泊業の競争激化に備えて新規の取り組みをしようと考えていましたが、コロナでその実行を見合わせ、結果的には救われました。

牟田誠一郎(十宜屋経営)